

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 遠隔システムを使った日台協働授業の実践—「日台合同レポート」の制作を中心に

Achieving Japan-Taiwan Joint Teaching by Long-Distance Teaching System:  
Centering on the Making of Japan-Taiwan Joint Report

doi:10.29714/TKJJ.201012.0008

淡江日本論叢, (22), 2010

作者/Author: 堀越和男(Horikoshi Kazuo)

頁數/Page: 139-163

出版日期/Publication Date: 2010/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201012.0008>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼 (Digital Object Identifier, DOI) 的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



## 運用遠距教學系統實現日台協同教學

—「日台共同報告」以製作為中心—

堀越和男

淡江大學日本語文學系助理教授

### 摘要

淡江大學日文系與東京外國語大學中文系運用遠距教學系統，雙方以對方的母語作為目標言語相互學習，將協同學習的要素導入教學課程。本研究除了 98 學年度第 1 學期進行的「遠距協同教學」課程之學習內容報告外，並以其學習活動中之「日台共同報告」的製作為主，提供作為遠距交流課程中教學模式之參考。

並以參加本課程學習者之行為模式・情感面等為主，調查學習者間是如何協同完成課題，這些行為・狀況等又會對學習者心理有何影響，這又與學習效果有何關聯，就質與量兩觀點深入探討如何提升學習效果的要因為何。

關鍵詞：遠距教學系統、遠距協同教學、協同學習、日台共同報告

Achieving Japan-Taiwan Joint Teaching by Long-distance  
Teaching System: Centering on the Making of Japan-Taiwan Joint  
Report

Horikoshi Kazuo

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

## **Abstract**

Department of Japanese at Tamkang University and Department of Chinese at Tokyo University of Foreign Studies are forming alliance in using long-distance learning system. Both sides learn the other side's mother tongue as the target language, and collaborative learning is incorporated into the curriculum. This study contains the report of "Long-distance Collaborative Teaching," first semester of academic year 2009, and has a focus on the making of "Japan-Taiwan Joint Report" for the learning activities. The purpose of this paper is to offer as a reference for long-distance exchange program. By studying the program participants' learning behavior and emotional responses, this paper probes into the issues of how the participants are cooperating to complete the tasks, how these behavior and circumstances are affecting the learners' mentality, and how are they affecting learning outcomes. From the perspectives of quantity and quality, this paper attempts to find the key to boosting learning outcomes.

Key words : Long-distance Teaching System, Long-distance Collaborative Teaching, Collaborative Learning, Japan-Taiwan Joint Report

## 遠隔システムを使った日台協働授業の実践

－「日台合同レポート」の制作を中心に－

堀越和男

淡江大学日本語文学科助理教授

### 要旨

淡江大学日本語文学系と東京外国語大学中国語学科では遠隔システムを利用し、お互いの母語を目標言語として学び合うといった活動を協働学習の要素を取り入れ授業のカリキュラムに組み込み行っている。本研究では、98 学年度 1 学期に行われた「遠隔協働授業」の実施に関し、その学習内容を報告するとともに、その中の活動の一つである「日台合同レポート」の制作を対象に遠隔交流における一つの授業モデルを提案した。そして、本授業に参加した学習者の行動や情意面に焦点を当て、学習者間でどのように協働し、課題を完成させていくのかを調査し、それぞれの行為や状況が学習者の心理にどのような影響を与え、それが学習効果と如何に関係していくのかを質的量的両観点から探ることにより学習効果を高める要因を明らかにした。

キーワード：遠隔システム、遠隔協働授業、協働学習、日台合同レポート

## 遠隔システムを使った日台協働授業の実践

－「日台合同レポート」の制作を中心に－

堀越和男

淡江大学日本語文学科助理教授

### 1. はじめに

現在、既に大学などの高等教育機関には遠隔教育のシステム（テレビ会議システムやパソコン）や設備など、ハード面は整備され、いつでもそれらを使い海外との交流を中心とした授業ができる態勢は整ってはいるものの、それを外国語教育にどう活かし、効果的な教育をどう行うかといったノウハウ等のソフト面の研究は依然として足りない。そのため、遠隔システムを利用した外国語教育の有効な指導法の開発とその教育効果の検証が急務となっている。

そのような中、一つの試みとし淡江大学日本語文学系では東京外国語大学中国語学科との共同により、「遠隔協働授業」と称する外国語教育の交流を、2007年から両校ともカリキュラムに組み込み行っている。この授業の目的は、インターネットを介し、学習者に目標言語話者との接触場面を定期的に提供し、協働的な双方向の交流と学習により互いの目標言語能力を向上させ、日台の学習者に互いの文化を理解させることである。そして、この交流の最大の特徴は、第一に各校のそれぞれの学習者がクラス内、及び両校のクラス間で互いに協力し合いながら共に学び合うといった協働的な学習形態によって交流が行われること。第二に、これに参加する者は互いの母語を目標言語としている学習者同士であるため、言語能力においてどちらかが優位な立場に立つということなく対等で互恵的な関係で学び合えることである。

### 2. 外国語教育における遠隔教育

1990年代、コンピュータの性能が急速に向上するのと、ネットワーク技術の進歩とが相まって、通信スピードの高速化が実現するこ

とで、学校教育においてもテレビ会議システムを使った授業を行うことが容易になり、外国語教育にも盛んに取り入れられるようになった。テレビ会議システムを利用した外国語教育の研究では、海外の学生たちとリアルタイムでコミュニケーションが行えるという特性を活かし、様々な国や地域と結び、多くの実践や研究が行われ、その成果が報告されている。しかし、これまでの研究の多くはその有効性や可能性を調査するといった基礎的な研究（久米・長谷川, 1999; 宮崎, 2002）、外国語教育における遠隔システムを利用した授業の活動内容を報告したもの（早川・川住, 2005; 重松, 2006）はあるが、学習者の行動と心理に焦点を当て、教室活動の実践、学習活動の実態を把握し、如何にすれば教育効果が上がるのかについて明らかにしようとした研究はあまり見られない。

### 3. 協働学習と遠隔授業

昨今、日本語教育の現場やその研究において「協働学習 (Collaborative Learning)」という言葉が注目を集めている。これは「互いに働きかけあいながら協力して創造的な活動を行う (館岡, 2005:95)」ことであり、この協働的な学びによって学習者の情意的側面、認知的側面、社会的側面に一定の教育的効果があると考えられている。それは、つまり、与えられた課題の完成を目標に学習者が相互に協力しながら学習に取り組むことによって学習への動機づけを高めること、そしてそれを達成する過程で教師等周囲から支援を受けながら、検討を重ねたり、自ら様々なリソースを使い調べたりする作業を通して日本語能力を向上させること、また、それだけでなくその課題から発生する多くの問題を話し合いによって解決していく中で、互いを理解し、協調性や社会性を身につけていくことができるというものである。

本研究の調査対象となる授業では、この協働学習の理念の下、遠隔システムを利用し、海を隔てて互いの母語を目標言語として学び合う台湾人学生と日本人学生とが一つのチームを組み、各チーム一

つのテーマについて台湾と日本で調査を行い、両国の文化の共通点と相違点を明らかにし、その結果を報告するといった活動を行った。

## 4. 遠隔協働授業の概要

### 4-1. 実施校と期間及び時間について

#### ①実施校：

(台湾側) 淡江大学日本語文学系

「日語会話 (四)」<sup>1</sup>…4年生1学期必修科目

(男性6名、女性16名、計22名)

(日本側) 東京外国語大学中国語学科

「中国語表現」…3年生2学期選択科目

(男性2名、女性6名、計8名)

#### ②実施期間：2009年10月上旬～同年12月下旬

#### ③接続時間<sup>2</sup>：木曜日10時10分～11時(台湾時間)

11時10分～12時(日本時間)

### 4-2. 遠隔協働授業の四つの活動について

98学年度<sup>3</sup>1学期の本授業は以下の四つの活動で構成されている。

#### ①第1活動：「地元紹介」

テレビ会議システムを通し、台湾は淡水をテーマ<sup>4</sup>に、日本は東京に関する話題を、台湾側は日本語で日本側は中国語で各校グループで紹介し合い、互いの理解と親睦を深め合った<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> 本授業のシラバスについては、稿末の「資料1」を参照。

<sup>2</sup> 台湾側は100分(10分の休憩を挟み前後50分ずつ)、日本側は90分の授業であるが、時差の都合上、毎回の接続は約50分である。但し、「発表」の際は10分～30分の延長を行うことがある。

<sup>3</sup> 台湾の学制では、学年度は8月に始まり、翌年7月に終わる。そのため、1学期の始業は9月中旬で終業は翌年1月中旬となる。

<sup>4</sup> 台湾側テーマ：「淡水の自然」「淡水の魅力的なスポット」「淡水の古跡」「淡水の食べ物」「淡江大学の秘宝」

日本側テーマ：「私の一週間」「東外大の食堂」

<sup>5</sup> 最終的に台湾側は調査した内容を画像にナレーションを加え映像としてまとめ、それを収めたDVDを日本に送り、日本側の学生に見てもらった。

## ②第2活動：「異文化自文化理解調査」

これは互いの文化に対する理解を促し、自文化への認識を深めることを目的に、遠隔システムを使って調査、報告を行うといった活動である。まずグループに分かれ、教師が用意した五つテーマ<sup>6</sup>のアンケートを使って、自分たちに対して調査を行い、その結果をまとめる。次にパソコンのチャット機能を使って日台で互いに同じアンケート調査を行い、日台の異同を「異文化対照レポート」にまとめる。更にそれをテレビ会議システムを使って報告し合う。なお、活動は台湾側の学生が中心となるものは日本語で行い、逆に日本側の学生の場合は中国語で行う。

## ③第3活動：「依頼調査」

台湾の学生が日本について知りたいことを日本の学生に、日本の学生が台湾について知りたいことを台湾の学生に対して互いに調査を依頼する。そして依頼を受けた側は指定されたテーマ<sup>7</sup>について調査を行い、その結果を台湾側は日本語で、日本側は中国語でまとめ、テレビ会議システムを使って報告し合うという活動である。

## ④第4活動：「日台合同レポート制作」

日本と台湾の学生が一つのチームを組み、それぞれ一つのテーマを設定し、日本と台湾で同時に調査を行う。その後、日台の異同やその理由を考察、中国語と日本語で同じ内容のレポートを書いて、台湾側は日本語で日本側は中国語で、後日発表す

---

<sup>6</sup> テーマは、「国家・社会関係」「大学関係」「職業関係」「地域社会・余暇関係」「人生観関係」で、このアンケートの作成には『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査』(<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/top.html> (最終アクセス日：2010年10月30日))を参照した。

<sup>7</sup> 日本学生の台湾学生に依頼したテーマは「若者がよく行くはやっている店」「台湾学生の休日」「台湾学生のデートスポット」「台湾学生の就職ランキング」「台湾の結婚式」の五つで、台湾学生の日本学生に依頼したテーマは「「約會必勝秘訣(デート必勝法)」」「假日的好去處(休日に行く所)」」「日本的結婚典禮(日本の結婚式)」」「日本人對同志看法(日本人の同性愛に対する考え方)」の四つであった。



る。発表の後、再度推敲し日台合同レポートを完成させる。

以上の活動のレポートについて、台湾側は日本人学生が書いた中国語の添削を、日本側は台湾人学生が書いた日本語の添削を互いに行った。なお、四つの活動のうち、本研究では調査対象として第4活動「日台合同レポート制作」の台湾側に焦点を当て分析を行った。

### 4-3. 第4活動「日台合同レポート」の概要

#### 4-3-1. 活動の目的

- 1) 活動のプロセスの中で協力し合い、相互に目標言語の使用の機会を多く得ることにより、その四肢技能（翻訳能力を含む）を向上させる。
- 2) 目標言語文化（異文化）の理解を深め、自文化について確認する。
- 3) 討論やレポート作成を通し論理的な思考力を鍛え、学術的な文章の書き方、発表の仕方を学ぶ。
- 4) グループ活動を通し社会性や協調性を身につける。

#### 4-3-2. 活動の内容

##### ① 日台グループの決定

◇日時：11月12日（台湾時間 10:10～11:00 に遠隔交流を行う）

活動名称：「お見合いゲーム」

活動の目的は、日本人と台湾人の合同グループを決定することである。予め前週の11月5日の授業で各校四つのグループを作っておき、当日はテレビ会議システムを用いて淡江大と東外大との合同グループを決定する。この活動は、所謂「フィーリング・カップル」ゲームの要領で遠隔システムを通して日中両言語で質疑応答を一定時間行った後、一緒に活動したいグループを指名し合うというものである。活動は終始和やかな雰囲気の中行われた。

〔宿題〕日台間で互いに連絡を取り合い、何をテーマとするか、テーマについてある程度の調査をしておき、12月3日にどんなことを話し合うか決めておく。

## ②内容に関する話し合い

◇日時：12月3日（台湾時間 10:10～11:00 に遠隔交流を行う）

活動名称：「日台グループ討論（1）」

目標はテーマ<sup>8</sup>と概要を決めることである。パソコンを使い「Skype」で宿題を踏まえ話し合った。何をどう話すか、どちらの言語で話すかは各班の自由とした。

〔宿題〕テーマを確定し、概要と調査の方法について考える。

◇日時：12月10日（台湾時間 10:10～11:00 に遠隔交流を行う）

活動名称：「日台グループ討論（2）」

目標は調査内容を検討し決めることである。前回と同様、パソコンを使い「JoinNet」<sup>9</sup>でグループ会議を行い、調査の内容や方法について話し合った。言語は前半中国語、後半日本語とした。

〔宿題〕アンケートを作成し、日台両国で調査を実施し、その結果を発表用のレポートにまとめ、PPTを作ってくる。

## ③調査結果の発表

◇日時：12月24日（通常授業）

活動名称：「発表」

日本側は冬季休業のため、台湾側のみ通常授業として発表を行った。言語は日本語で、各グループ制限時間は10分、質疑応答は5分である。各発表は前半と後半に分け、発表者はその場で抽選で決めた。そして、その後日本の学生と連絡を取り合い、日本語と中国語で同じ内容のレポートを完成させた。提出期限

---

<sup>8</sup> [1班] テーマ：「大学生の年越し」（台湾側6名・日本側2名）  
[2班] テーマ：「カラオケで歌おう！」（台湾側6名・日本側2名）  
[3班] テーマ：「住宅事情」（台湾側5名・日本側2名）  
[4班] テーマ：「国境を越えてラブラブー日本人と台湾人の恋愛観」（台湾側5名・日本側2名）

<sup>9</sup> これはインターネットを使った多地点 Web ビデオ会議システムで、オーディオ、ビデオ、およびテキストチャットを使用して他の利用者との会話を行うことができる。詳しくは <http://www.joinmeeting.net/document/JN4.2.3/index.htm>（最終アクセス日：2010年10月29日）を参照。

# airiti

は1月7日とし、完成したレポートは東京外国語大学 e-Learning システムに掲載し、参加者全員が閲覧できるようにした。なお、発表の際録画した映像は、後日東外大に送り、日本の学生たちに見てもらった。

## 4-4. 学習の評価

この授業での学期成績は、活動点（70%）と平常点（30%）に分かれ、活動点に関して1学期に四つの活動を行ったことから、一つの活動は満点を17.5点として換算する。そして、本研究における第4活動（「日台合同レポート」）の評価は、「レポート」「PPT」「発表」の三つに分かれ、レポートは「内容」「構成」「体裁」「調和<sup>10</sup>」によって35%で評価し、「PPT」は15%、発表は「発音・話し方」「態度」「質疑応答」によって50%で評価を行い、100点満点で計算した。なお、この評価は団体評価であり、そのグループに属するメンバーは全て同点とした。また、平常点は、それぞれの活動の完了後に書いた作文が4回と、学生が書いたレポートから出題するディクテーションの小テストも同じく4回、そして授業に対する積極性などから個人評価を行った。

## 5. 研究の目的

本活動に参加した学習者がお互いにどのように協働し、課題を完成させていくのか、彼らの行動や心の動きに焦点を当て、それらが学習の成果とどのように関係しているのかを調査し、学習の実態を明らかにすることにより、その効果を高める要因を探る。そして、遠隔システムを利用した外国語教育の、一つの有効な授業モデルを提案する。

## 6. 分析と考察1（質的研究法によるアプローチ）

---

<sup>10</sup> 複数の学習者で一つの文章を書く場合、文体やレトリック、表現等に調和がとれていない場合があるため、それを本項目によって評価した。なお、レポートの評価表は活動の際注意を払う点を意識させるため、執筆を開始する前に学生に公開した。

## 6-1. 調査の対象と期間

対象：淡江大学本科目履修者 22 名（4-1. ①に同じ）の自由記述による作文<sup>11</sup>を分析の対象とした。

期間：第 4 活動の最終日である 2009 年 12 月 24 日の授業の宿題として作文を課し、翌年 1 月 8 日に回収した。

## 6-2. 分析の方法

学習者の授業に対する評価及び困難点、心理的状态、行動、並びにその反省点等を構造的に把握するのに有効であると判断し、22 名の作文の非構造的な記述部分を対象に KJ 法による分析を行った。手順としては、まず一つの意味内容を表すセンテンスごとにそれぞれ切片化してその類似性によって分類し、カテゴリーを生成した。次に導き出されたカテゴリー、サブカテゴリーを意味の観点から収束、精緻化し、図 1 のように図解化した。以下、カテゴリー：【 】, サブカテゴリー：《 》、サブカテゴリーの一段階前のカテゴリー：〈 〉、記述されたデータ：「 」で示し、文章化した。なお、( ) 内の数字は切片化したカードの件数である。

## 6-3. 分析の結果

### 6-3-1. カテゴリーA【課題遂行のための作業】

#### a. 《交流における一連の作業》(5 件)

授業の対面式交流の前には、台湾側のメンバーと話し合い、合同調査のテーマや日本人学生に対する質問を考え、授業の際それらについて日本人学生と討論した。授業の後、メールや MSN<sup>12</sup>を使って連

---

<sup>11</sup> 「第 4 活動の反省と感想」と題し、次の四点を含め書くように指示した。

1. 第 4 活動全般（準備も含む）の、個人及びチーム（東外大の学生も含む）の反省点。
2. 2 回行った日台グループ討論について。
3. 東外大の学生とどのようにレポートを完成させたのかについて。
4. 第 4 活動の感想。

<sup>12</sup> Microsoft Network の略で、Microsoft が運営しているポータルサイトの名称である。MSN には様々なサービスがあるが、ここではチャット機能を指す。

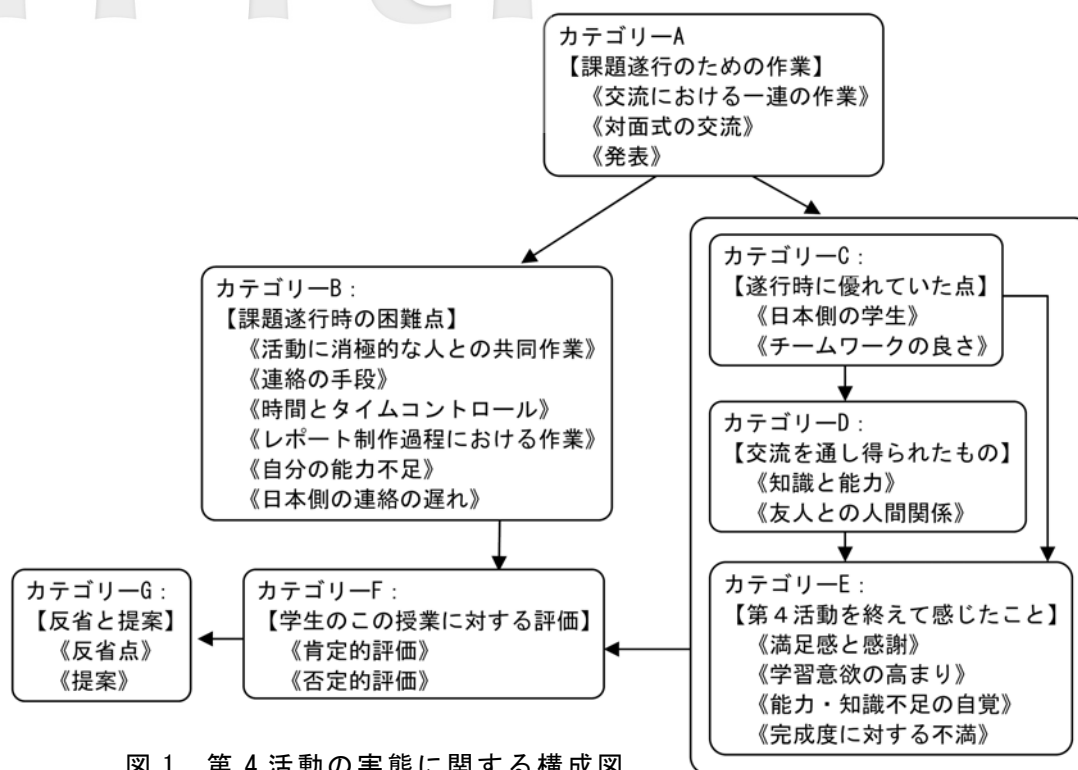


図1 第4活動の実態に関する構成図

絡を取り合いそれぞれの仕事を割当てた。そして、日本語と中国語のアンケートを作り両国で実施した。その結果が集まった後、日台双方でそれぞれ分析を行い、どのようにレポートを完成させるか討論した。最後は、日本側の学生と協力し日本語と中国語で同じ内容のレポートを二本完成させた。その後、授業で発表し、指摘された点を踏まえレポートを修正し、再度提出した。

#### b. 《対面式の交流》(10件)

レポートを作成するために二回の日台グループ討論を行った。一回目は「Skype」で、二回目は「JoinNet」で討論したが、このような交流方式は、その多くが楽しいと感じているが、一方で緊張して話せなかったという者もいる。また、ソフトについてはSkypeが討論しやすいと感じる者がいる一方、JoinNetでの会議のほうが新鮮で面白かったと感じる者もいた。Skypeは相談しながら代表者が意見を伝えられるので効率的に討論が進められるが、話す人が限られ

てしまう。一方、JoinNet は一人一人の顔を見ながら話せるのはいいが、発言の機会を同じグループの司会の学生が決めるので、効率的に意見交換するためにはその役割が重要となる。

c. 《発表》(4件)

《発表》では暗記した内容を話すのではなく、各人 PPT を見てできるだけ自分で考えながら伝えたいことを話すよう心がけていたが、同じグループの発表者が言葉に詰まった時、他のメンバーたちも自分のことのように緊張していたようである。また、「練習不足で PPT ばかり見て聴衆が見られずうまく発表できなかった」、「漢字の読み方や分析内容も間違っていたところが多かった」と残念に思う者もいた。

### 6-3-2. カテゴリーB【課題遂行時の困難点】

a. 《活動に対して消極的な人との共同作業》(15件)

ほとんどの者がいいレポート書くため、いい発表をするために多くの労力と時間を割いて作業に取り組んでいるのに、グループ内に〈積極的に取り組まない〉人がいる場合、その人に対して不満を抱く傾向が見られる。例えば、討論の際いつも自分の意見を言わず、意見を言った人に責任を転嫁するような態度をとったり、自分の役割のみ果たせばそれで終わりというメンバーからはそれ以上の協力が得られず、そのようなことも原因となりレポートをうまく書き進めることができないこともあったようである。また、発表の際、練習もせずただ PPT の文字を棒読みしていただけたメンバーに憤りを感じていたグループもあった。なぜなら、「みんなで一生懸命調査分析しまとめたのに最後の発表で台無しにされた」と感じたからである。また、決められた期日及び時間までに担当の仕事を完了しないメンバーに対しては、みんなに迷惑がかかるため、〈約束の時間〉までに仕上げたいと感じている。

b. 《連絡の手段》(5件)

授業外の《連絡の手段》としては、メールや MSN を使っていたが、中にはメールやパソコンをあまり使わない学生や、パソコンが壊れ

# airiti

ている学生と連絡がつかず〈情報の交換ができない〉ため、レポートの作成が滞ることがあった。普段の連絡は、メンバーの都合のよい夜に設定しMSNを使って討論したが、全員がMSNには常にいなかったり、日本側のメンバーも揃うことがなかった。コミュニケーションの不足を感じているグループほどこの課題の難易度は高いと感じている。

## c. 《連携不足》(14件)

台湾側のグループのメンバーは抽選で決定しているため、クラスの全ての人と組む機会がある。しかし、あまり親しくない人や組みたくない人とも組むことも少なからずある。その場合、そのグループでは連絡の頻度も少なくなり、自分の役割を果たすのみでそれ以上の作業は敬遠する傾向があり、〈連帯意識〉が足りず一つにまとまらなかった。また、各グループはリーダーを決めていないが、学生の中には進んで中心的な役割を果たそうとする者もいた。しかし、最終的に一人でまとめようとしたがうまくまとまらず、日本側の仲間と協力しながらまとめたというケースもあった。この課題の遂行にあたっては、〈チームワーク〉が大切な条件となる。

## d. 《時間とタイムコントロール》(11件)

レポート作成には、各グループとも比較的多くの時間を費やし、時間が足りないと感じる者が多い。特にアンケート調査の部分は時間がかかり、レポートの締切りの前日は大変だったようである。発表当日は全グループのレポートの内容について小テストを行うので、他のグループのものも読んでくるように教師から指示されていたが、自分のグループの発表の練習で精一杯で、小テストの準備をすどころではなかった。このように〈時間的余裕〉がないのは、前述の a. b. c. にもその原因があるが、もう一つは〈タイムコントロール〉にある。予定を立て、それに従いポイントを押さえて討論すればもっと効率的に意見がまとまっていたらろう。限られた時間を如何に管理するかが重要である。

## e. 《レポートの作成過程における作業》(20件)

まず、最初の作業としては、パソコンのチャット機能を使った〈討論〉によって日本側の学生とともに〈テーマを決めること〉であった。しかし、台湾側のグループ内にしろ、日台の合同チームにしろ、それぞれが自分の意見を言い合い、時間をかけて討論してもなかなかみんなの考えが一つにまとまらない時には、焦りを感じていた。また、決めたテーマも漠然としており、内容についてもうまく話し合えないグループもあった。テーマと構成が決まると、次は〈文献調査とアンケート調査〉を行った。文献調査については資料の取捨選択や調査の範囲をどこまで拡大するかについて悩み、アンケート調査ではアンケートを作成すること、そしてそのアンケートを実施し、その結果を収集整理すること、そしてそれを分析すること、最後に文章を翻訳すること等、どれも難しかったと感じている。

f. 《自分の能力不足》(2件)

レポート作成を難しくしている原因は、以上の外的なものだけではなく、討論する際自分の意見に自信が持てず、話すことができなかつたり、原稿を書く時思考力が足りないと感じることがある等、自分の能力にも問題があると感じている学生もいる。

g. 《日本側学生の連絡の遅れ》(15件)

レポート作成過程での日本側の学生との交流における不満の大部分は、連絡がなかなかつかなかつたことである。日本側の学生たちのほとんどは普段MSNを利用しておらず、討論する機会や話し合う時間は主に授業に限られていた。それ以外での日本側の学生との情報のやりとりの手段はメールしかなく、不効率だったと感じている。また、日本側の学生が担当した作業について約束の期日を守らないことや対応が遅い時には、苛立ちを感じながら待つこともあったようである。

### 6-3-3. カテゴリーC【課題遂行において優れていた点】

a. 《日本側の学生》(7件)

授業での討論は時間が限られていたが、自宅で《日本側の学生》と頻繁にMSN等で交流ができたこと、テーマや内容について討論す



る時は緊張しながらも興奮と楽しさを感じていた。また、《日本側の学生》が積極的にレポートを書き、見直しもきちんとしてくれたこと、順調にレポートを完成できたことに喜びを感じている。

b. 《チームワークの良さ》(9件)

それぞれ自分の意見をしっかり述べ、互いの意見を尊重したことで、チームワークはよりよいものとなった。そのため、日台双方の積極性は十分で、みんなレポート作成にやる気があり、積極的な態度で取り組み、自分の担当した部分をきちんと完成させ、台湾側グループ内及び日本側との作業は互いに協力し合いうまくいった。

**6-3-4. カテゴリーD【交流を通し得られたもの】**

a. 《知識と能力》(15件)

日本語能力の向上だけでなく、レポートや論文の書き方、スピーチの能力、PPTの作成する〈能力〉が向上した。また、日本人学生との交流により、日本人と台湾人の考え方の相違点や日台の文化や習慣の異同を知り、様々な興味深い発見があった。そして、日本や日本文化についての理解も深まり、〈知識〉も広がったと感じている。

b. 《友人と人間関係》(8件)

台湾側のメンバーと仲良くなれたことも喜ばしいことであるが、それにも増して日本人の〈友人〉ができたことに大きな喜びを感じている。また、お互い交流し、討論していく中で相手の立場から物事を考えることや相手の意見を尊重すること等、〈人間関係〉やチームワークの重要性を学び、そのための態度や責任の重要性も知ることができた。

**6-3-5. カテゴリーE【第4活動を終えて感じたこと】**

a. 《満足感と感謝》(7件)

今回の遠隔授業では、日本語と中国語で話し合っ、レポートを書き、完成させていく過程の中でグループの〈連帯感〉も強くなっていき、日本側台湾側のメンバーと一生懸命頑張ったことに〈充実感〉を感じていた。そして、問題があってもみんな協力して乗り越え、努力してレポートを完成させたときは、一つの〈達成感〉を

得ることができた。それは「言葉ではたとえられないほどの喜び」であり、この授業に対する〈満足感〉となった。また、自分の様々な能力の成長を確認することで〈自信〉にもつながった。このように学生たちは授業で得た成果に対して喜びを感じると同時に、この課題と一緒に取り組んだチームのメンバーに対して〈感謝の気持ち〉を抱いている。

b. 《学習意欲の高まり》(8件)

課題を行っていく中でこの授業の最後まで一生懸命頑張りたいと思うようになっていくのと同時に、これを機にこれからもっと勉強して日本語を上手になろうという意欲が強くなった。また、次回このような機会があれば、日本人学生と交流したり、一緒にレポートを書いたりしてみたいという希望を持っている学生もいた。

c. 《知識・能力不足の自覚》(8件)

今回の課題を通じて、自分の欠点を自覚した学生は少なくない。例えば日本語能力の不足から、討論している時、相手の話が分からなかったり、うまく発表できなかつたので、これから一層努力したいと抱負を述べている。

d. 《成果に対する不満》(3件)

レポートの作成がうまくいかず調査の内容について不満を感じる者もいる。特にアンケートの質問項目の設定について日台両方のアンケートが内容的に一致していなかつたので、両方の調査結果を比較し違いをはっきり見ることができなかつたチームもあつた。しかし、このように感じる学生ほどまじめに課題に取り組んでいる。

## 6-3-6. カテゴリーF 【学生のこの活動に対する評価】

a. 《肯定的評価》(26件)

第4活動のレポートの作成は、制限された時間の中で忙しさを感じつつも、熱中でき、楽しかった、面白かったと感じる者は多い。その中でも、日本側の学生と協働しながら一緒にレポートを作ったこと、授業で同じ世代の日本人と話したり討論したこと、解説書を参考に自分で工夫しながら、PPTのスライドを作ったこと等、〈貴重

な経験) だったと評価している。また、授業での日台の話し合いでは全員に日本人学生との会話のチャンスがあり、日本人と交流ができたことや、日本人学生と協力しながら一緒にレポートを作るという課題は彼らにとって初めての経験であり、〈新鮮な体験〉であった。

b. 《否定的評価》(11件)

第4活動のレポートの作成はそれまでのレポート(第1～第3活動)に比べ、〈大変な作業〉だった。具体的には授業のテンポが早いこと、調査は複雑で得られた結果を分析し何回も討論して直したこと、日本人学生と連絡し合いレポートにまとめたこと等である。そして、それを日本語で発表したか、うまく伝えられるか不安を抱えていた学生は多い。また、発表で間違えたり、発表後の質疑応答で説明できなかったことに、〈恥ずかしさ〉を感じている者もいた。

### 6-3-7. カテゴリーG【反省と提案】

a. 《反省点》(10件)

「日本側の学生との交流において積極的に話さなかった」、「授業以外の時間はあまり東外大の学生と交流しなかった」、「せっかくの会話練習ができるチャンスなのに、その機会を生かせずもったいなかった」等、交流に対する自らの積極性の不足について後悔していた。また、まじめに作業に参加しなかったこと、担当した作業にミスがあったこと、約束の期日までに作業や連絡をしなかったこと、締め切り時間に間に合わなかったことでメンバーや日本側の学生、教師に対し迷惑をかけたことについて反省していた。そして、調査についてもより規模を大きく、且つ深く分析をしていたなら、結果はもっと意義のあるものになっていたのではなかと、振り返っていた。

b. 《提案》(8件)

レポートを作るのには一人一人の意見が重要なものとなるが、日台双方とも時間を作ってよく話し合い、グループ内の意思の疎通を図る必要がある。活動の中で自分の意見をあくまで主張し折り合いがつかず、結局話し合いにならないこともあったが、自分の意見

を述べるだけでなく、他のメンバーの意見も尊重するべきである。逆に、意見を言う人がいなければ、少数でものごとを決めるしかなく他のメンバーは指示を待つのみで積極的に作業を行うことができない。この作業は日本語だけではないので、日本語が苦手だとしても、ほかのことで役に立ちたいと思う積極性、与えられた仕事を果たそうとする責任感、そしてお互いの包容と協力があればよりよい成果を生み出すことができるのではないかとの《提案》があった。

## 7. 分析と考察 2 (質問紙調査法によるアプローチ)

### 7-1. 調査対象と調査日

調査対象：淡江大学本科目履修者 22 名に対し、稿末「資料 2」の 34 項目からなる 7 件法のアンケートを行い、21 名から回答を得た。

調査日：2009 年 12 月 24 日の授業終了の際行った。

### 7-2. 分析の結果

表 1 平均値の高かった質問

順位	項目	質問	平均値	SD
1	27	発表する前、上手に話せるか心配だった。	6.10	0.92
2	4	合同班ではみんなで協力して資料をまとめ、レポートを書くことができた。	6.00	0.98
3	20	友達との活動の中でチームワーク（協調性・社会性）を学ぶことができた。	6.00	0.76
4	11	東外大の学生はレポートを完成させるために頑張っていたと思う。	5.95	0.79
5	28	発表に失敗すると、みんなの成績が下がってしまうのではないかと不安になった。	5.90	1.06

まず、アンケートの回答の平均値からこの活動に対する学習者の総体的な意見や考えの強さを見てみる。前項の 6-3-6. の b では、この活動に対する《否定的評価》として学習者の発表への不安について指摘したが、活動終了後に行った質問紙調査でも、表 1 のように最も高い値を示したのは「発表の不安」であった。

「発表の不安」は項目 22 の「スピーチ能力の向上」と負の相関 ( $r=-.44$ ) にあり、発表対する不安が強いほどスピーチ能力が向上したとは感じず、向上しない（うまく話せない）から不安が強いという傾向があることが分かった。また、2 位から 5 位までの質問は、本活動の目的（4-3-1.）で 4 番目に掲げた「グループ活動を通し社会性や協調性を身につける」ことについてその範疇に含まれるものであるが、この活動をクラスメートだけでなく東外大の学生との協働で行うことにより、人間関係を築いたり、それを円滑に保つための術を確認できたことも一つの大きな成果である言えよう。

表 2 充実感と達成感との相関係数

項目	質問	12 充実感	14 達成感
6	合同班の中で決めた約束は全員がきちんと果たした。	.81**	.83**
21	グループの作業を通して人間関係の築き方について学ぶことができた。	.91**	.80**
22	スピーチ（発表）の能力が高まった。	.83**	.77**
23	文章を書く力が高まった。	.77**	.80**
24	論理的な思考能力が身に付いた。	.85**	.78**

\*\*  $p < .01$

また、この活動で学生たちは、時間に追われ、メンバーの協力がなければ完成できない、自分一人ではどうにもできないというストレスと発表のプレッシャーを感じ、その過程で「時間が足りない」、「大変だ」と不満をこぼしていた。しかし、それよりも多かったのが活動終了後に聞かれた「楽しかった」、「面白かった」という声である。おそらくそれは「達成感」や「充実感」に置き換えることができると思うが、表 2 のように調査でこの二つの項目（項目 12・14）、と相関が非常に強かったものは、項目 6 の「チームの全員が決めた約束を果たした」と項目 21 の「人間関係の築き方を学んだ」というものだった。そして、その「充実感」「達成感」は「発表能力」（項目 22）、「文章力」（項目 23）、「思考力」（項目 24）の向上にも高い相関があることが分かった。つまり、これはそれぞれが責任を持ち、

積極的に作業を行い、人間関係が良好であったチームほど、且つこの活動を通し学ぶことが多かったと感じる者ほど、この活動に肯定的な感情を抱いていたことを意味している。なお、項目6の「約束を果たすこと」は、アンケートの〔協働について〕の項目9と10、〔心理的側面について〕の項目12から19と〔学習効果〕の項目21から26の、その全てと有意確率1%未満で、強い正の相関(平均  $r=.79$ )が認められた。つまり、グループ内で決めた約束をそれぞれが守り実行することにより、活動が円滑に行われ、人間関係からくる精神的なストレスが取り除かれ、そして学習が促進されることによって得られる知識や能力も多くなり、結果的に充実感や満足感を感じられるのである。

表3 向上心と学習意欲との相関係数

項目	質問	15 向上心	17 学習意欲
16	機会があれば、今後も東外大の日本人学生と交流したいと思う。	.83**	.83**
18	今回、東外大の学生と友人になれて(知り合えて)嬉しい。	.85**	.90**
26	今、日本のことや日本人のことをもっと知りたいと思うようになった。	.85**	.89**
23	文章を書く力が高まった。	.83**	.80**
34	第4活動の前と後を比べると、後のほうが日本語を話す不安が軽減した。	.82**	.86**

\*\*  $p < .01$

それから、表3から項目15の「向上心」と項目17の「学習意欲」についての二つの質問と非常に強い相関を示したのは、16の「今後も東外大の学生と交流したい」、18の「東外大の学生と友人になれて嬉しい」、26の「日本のことや日本人のことをもっと知りたいと思うようになった」、23の「文章を書く力が高まった」、34の「日本語を話す不安が軽減した」であった。本授業の学習意欲の高まりに関し、林(2008)では、2007年に行った淡江大学と東京外国語大学との同様の遠隔授業においても、学習者同士の情報交換及び相手文化への理解の重要性を指摘しているが、この結果からも彼らの学習に対するやる気には、日本人学生との交流と日本語の上達が大きく

# airiti

影響していると考えられる。つまり、この活動を通し東外大の学生（日本人）と親しくなり、楽しく交流できた者ほど、また文章を書く力を伸ばし、話すことへの不安が軽減した者、換言すれば話す力の向上を実感した者ほど、日本語学習に対する向上心や意欲が高まったと言える。

## 8. まとめ

一般的に自分の成績を左右するのは自分の努力であると多くの学生が考える。しかし、この授業では、そうはいかない。クラスメートと話し合い、日本の学生と協力しながらレポートを書き上げなければならない。しかも、自分が担当した作業ができなければ、あるいは発表で自分が失敗すればメンバーの成績も下がるのである。この活動では学生は常にそのようなストレスにさらされる一方、課題の完成に向け、責任をもってそれぞれが決められた約束を果たし、台湾側のグループだけでなく、日本側のグループともうまく協力し合いながら課題を遂行したチームは、そのプロセスの中で多くのものを得、それは終了後に大きな達成感と充実感となり、日本語の学習意欲の向上に繋がった。

今後更に技術が進歩し、遠隔教育を取り巻く環境は発展し整備されていくことが予想され、海外の教育機関とインターネットを介した交流もより簡単にできるようになるだろう。本研究では、本活動における学習プロセスの実態を把握するとともに遠隔システムを利用した外国語教育に一つの授業モデルを提案したが、これが今後このような授業を予定されている関係者の方々の参考になれば幸いである。

## 謝辞

本授業は東京外国語大学中国語学科の林俊成先生との共同で行っているものであり、その実施及び本研究の調査にあたりご支援とご協力をいただいた。また、郭峻志君には修士在学中2年間にわたり

# airiti

本授業並びに本研究のアシスタントとして手伝ってもらった。ここに記して謝意を表する。

## 付記

本研究は、『國科會處專題研究計畫（「外語教育中的遠距教學方法與其教育成效－淡江大學與東京外語大學協同學習之實行」NSC 98-2410-H-032-055-）』の助成を受け実施し、2010年8月1日に国立政治大学において開催された「201 世界日語教育大会」で口頭発表を行い、その内容に加筆修正したものである。

## 参考文献

- 久米昭元・長谷川典子(1999)「日豪遠隔実験授業プロジェクト実施報告：テレビ会議システムを利用した日豪合同授業-分析と考察（ISDN を用いた日豪遠隔学習プロジェクト総括報告：異文化間遠隔高等教育ネットワーク構築に向けて）」『研究報告 Report on multimedia education』Vol.8, pp.25-43, メディア教育開発センター
- 重松淳・伴野崇生・曾怡華・黄佳瑩(2006)「遠隔会議を取り入れた外国語教育カリキュラムの問題点－ヒューマンセキュリティへの基盤研究－」『総合政策学ワーキングペーパーシリーズ』No. 99, pp.1-64, 21 世紀 COE プログラム「日本・アジアにおける総合政策学先導拠点」慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科, (<http://coe21-policy.sfc.keio.ac.jp/ja/wp/WP99.pdf> (最終アクセス日：2010年10月30日))
- 舘岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ 日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』, 東海大学出版会
- 早川直子・川住有希子(2005)「早稲田エデュケーション・タイランドとの遠隔教育」『早稲田大学における遠隔日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター, pp. 23～52
- 宮崎里司(2002)「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議シス



テムを利用したインターアクション能力開発プログラム」『講座  
日本語教育』第38分冊，pp.16～27，早稲田大学日本語研究教育  
センター

林俊成（2008）「日中遠隔協働授業における語学教育の実施と評価」  
『東京外国語大学論集』第76号，pp.191～212，東京外国語大学

## 資料1 「日語会話（四）遠隔協働授業シラバス」

週	月日	活動別	授業形態	授業内容
第1週	2009年 9月17日		通常授業	ガイダンス（授業説明） （活動）友達紹介
第2週	9月24日	第1活動(1)	通常授業	グループ及びテーマの決定 テーマに関するグループ内討論
第3週	10月1日	第1活動(2)	通常授業	第1活動の模擬発表 模擬発表の検討
第4週	10月8日	第1活動(3)	遠隔「発表」	発表及び質疑応答 第2活動の説明
第5週	10月15日	第2活動(1)	通常授業	自文化確認アンケート アンケート結果の集計と討論
第6週	10月22日	第3活動(1)	通常授業	第3活動の説明 グループと依頼テーマの決定
第7週	10月29日	第2活動(2) 第3活動(2)	遠隔「対談」	異文化理解アンケート 第3活動についての話し合い
第8週	11月5日	第3活動(3)	通常授業	第3活動の模擬発表 模擬発表の検討 第4活動の説明
第9週	11月12日	第4活動(1)	遠隔「お見合い ゲームゲーム」	合同グループの決定
第10週	11月19日	（台湾側中間試験期間）		
第11週	11月26日	第3活動(4) 第2活動(3)	遠隔「発表」	第3活動の発表 第2活動レポートの話し合い
第12週	12月3日	第4活動(2)	遠隔「グループ 討論（一）」	「日台グループ討論」（1） 各校グループ活動
第13週	12月10日	第4活動(3)	遠隔「グループ 討論（二）」	「日台グループ討論」（2） 各校グループ活動
第14週	12月17日	第2活動(4)	通常授業	第2活動の「異文化対照レポ ート」報告会
第15週	12月24日	第4活動(4)	通常授業	第4活動の発表
第16週	12月31日	第1活動(4)	通常授業	映像作品中間報告 グループで作品の検討

第17週	1月8日	第1活動(5) 総括	通常授業	映像作品発表会 遠隔授業反省会(作文)
第18週	1月15日	(台湾側期末試験期間)		

## 資料2 第4活動に関するアンケート

[クラスとグループについて]

- 1) このクラスは一つにまとまっていて、連帯感を感じるようになった。
- 2) このクラスの雰囲気は好きだ。
- 3) 第4活動の班員(日本人を含む)とは仲が良かった。
- 4) 合同班ではみんなで協力して資料をまとめ、レポートを書くことができた。
- 5) 合同班の中で真剣に取り組まない人がいて不満を感じたことがある。
- 6) 合同班の中で決めた約束は全員がきちんと果たした。
- 7) EメールなどやMSNのチャットで(文字)合同班のメンバーと連絡をとった。
- 8) 教学平台のビデオは学習(練習)の参考になった。

[協働について]

- 9) グループ内(台湾側)の学生と協力できたと思う
- 10) 東外大の学生と協力できたと思う。
- 11) 東外大の学生はレポートを完成させるために頑張っていたと思う。

[心理的側面について]

- 12) 第4活動では充実感を感じた。
- 13) 第4活動は第1・2・3活動より楽しかった。
- 14) 今、達成感を感じている。
- 15) 今、日本語がもっと上手になりたいと思う。
- 16) 機会があれば、今後も東外大の日本人学生と交流したいと思う。
- 17) 遠隔協働授業を通して、日本語の学習意欲が湧いた。
- 18) 今回、東外大の学生と友人になれて(知り合えて)嬉しい。
- 19) 授業の前、第4活動は楽しみにしていた。

[学習効果]

- 20) 友達との活動の中でチームワーク(協調性・社会性)を学ぶことができた。
- 21) グループの作業を通して人間関係の築き方について学ぶことができた。
- 22) スピーチ(発表)の能力が高まった。
- 23) 文章を書く力が高まった。
- 24) 論理的な思考能力が身に付いた。
- 25) PPTの操作能力が身に付いた。
- 26) 今、日本のことや日本人のことをもっと知りたいと思うようになった。

[遠隔授業に対する不安]

- 27) 発表する前、上手に話せるか心配だった。
- 28) 発表に失敗すると、みんなの成績が下がってしまうのではないかと不安になった。
- 29) 今回の課題は難しかった。
- 30) ちゃんと課題を行わないと、先生に叱られるのではないかと不安になる。
- 31) 東外大の学生の前で日本語が上手に話せないのは恥ずかしい。
- 32) 自分の日本語のレベルは他の同級生より低いのだろうか心配だ。
- 33) 東外大の学生と課外で話し合うとき、ちゃんとコミュニケーションできるか不安だ。
- 34) 第4活動の前と後を比べると、後のほうが日本語を話す不安が軽減した。